

「尾瀬を守って」

文溪堂 5年 神戸淳吉作

平野長 靖は、尾瀬沼のほとりに建てられた長 蔵小屋の主人。長蔵小屋は、長靖の祖父の長蔵によって、建てられた山小屋です。

冬には雪や寒さで大変なところですが、春には、高山植物のミズバショウなどが咲き乱れ、すばらしい別天地です。

長蔵は、尾瀬の美しさを多くの人に伝えたくて、1915年（大正4年）に一人で山小屋を建てたのでした。

尾瀬沼をおおっていた、ぶあつい氷が、あたたかな日ざしを受けて、だんだん解けてきました。しつ原の水も、ぬるんできました。

それを待っていたように、ミズバショウの白い花がさきました。純 白のミズバショウの花が、太陽の日にはえて黄金のようにきらめきます。

大勢の登山者や観光客が、しつ原に丸木を二つわりにしてしいた長い木の道を、じゅずつなぎに通っていきます。春から夏にかけて、尾瀬がいちばん美しくて、にぎやかになり、活気づくころです。

一人の人が、木の道からしつ原へ下りていくと、別のグループの人も、そろそろと後に続きます。じゅずつなぎの道とちがって、ゆっくり写真がとれ、おし花用の花もつむことができます。「もしもし、その花、とらないでください。とるのは写真だけにしましょう。」

長靖は、山小屋のいそがしい仕事の合間をみては、つとめてしつ原の見回りに出かけます。祖父の長蔵や父の長英もやっていた、尾瀬の自然を守るための活動です。

長靖は、あまり強いことを言えない人がらでしたが、このときばかりは心をおににして、注意をします。

ところが、心配していたことが、本当になりました。

アヤメ平は、尾瀬でも有名なしつ原で、たくさんの貴重な植物が群生していました。ところが、そのしつ原が、すっかりあれ果ててしまったのです。尾瀬の美しさにひかれてやってきた、多くの人々にふみつけられたためでした。

・・・もう少し早くさくをするなり、人が立ち入らないように手をうてばよかった。

長靖は、くやみました。でも、後の祭りです。大勢の登山者や観光客が木の道から下り、思い思いに歩き回ったため、しつ原が、ふみ固められてしまい、貴重な植物が次々とかれていきました。それだけではありません。山を切り開いて、自動車道路が造られそうになりました。

なかでも大きないたでだったのは、三平峠にこんこんとわきでるいずみの、清らかな清水がとだえたことでした。山をおとずれる人ののどをうるおし、山のけものや小鳥、いいえ、草木にいたるまでの生き物のいのちでもあった水でした。このいずみがかれる少し前、長靖は、ブルドーザーがいずみのすぐ上をふみにじっているところを見て、いずみは確実にかれて、赤いどしゃでうめつくされるだろうと思いました。

また、チェーンソーがうなり、太いブナやミズナラなどの木が、見る見るたおされていきました。長靖は、少年時代に遊んだ思い出が次々と切られるのを見て、自分の身を切られる思いをしたのです。



・・・ああ、このままでは尾瀬がめちゃめちゃになる。とり返しのつかぬことになる。

長靖は、あまりにすざまじい工事ぶりに、息も止まる思いでした。急いで、村や県に、工事の中止をうったえました。そればかりか、東京に出ていって、政府にこのことを直接訴えたのです。

この長靖のはたらきによって、道路工事は中止され、尾瀬の自然はこわされることなくすみしました。

こうして、平野一家が守り続けてきた尾瀬の自然の美しさは今も、ここをおとずれる人々の心をなごませてくれるのです。

その後、長靖は、このような尾瀬の自然を守ろうという運動を進めていくとちゅうの1971年、思いもかけず、ふぶきの中でたおれてなくなってしまいました。どんなに心残りであったことでしょうか。



別天地・・・この世以外の世界 とてもすてきな場所

しつ原・・・低温で、しめりけの多いところに発達した草原

じゅずつなぎ・・・人やものが、じゅず玉のように、たくさんつながること

チェーンソー・・・エンジンを使って木を切る、自動のこぎり

『尾瀬に死す』 平野長靖著 尾瀬沼畔長蔵小屋

『尾瀬はぼくらの自然塾』 須藤澄夫著 あさを社

『尾瀬の植物図鑑』 新井幸人著 偕成社

<http://www.kahoku.co.jp/kigai-s/content10.html>

平野紀子（長靖の妻、現在の長蔵小屋の主）

<http://www.ask.ne.jp/~erminea/buna/oze/>

尾瀬の総合サイト

「一ふみ十年」 東書 5年 (吉藤一郎作「一ふみ十年」)

勇たちの乗った高原バスは、ようやく^{むらどろ}室堂についた。ここは、海抜2500メートルもありもあり立山直下に広がる^{こうざんしょくぶつ}高山植物におおわれた台地である。



勇は、はじめて間近に見る立山の美しさに、すっかり見とれてしまった。母と二人で^{ゆうほどう}遊歩道のそばの草むらにこしををろし、あたりの3000メートル級の山々をながめていた。

「もしもし。」

という声にふり向くと、わかくさ色の制服を着た男の人がえがおで立っている。

「すみませんが、そこにこしをおろさないでください。あなた方のこしの下は全部高山植物なんです。ほら、そのクリーム色の花は、ちんぐるまという高山植物ですよ。」

そう言われて勇たちは、あわてて遊歩道にもどった。そのあとは、しばふのような草が折れ曲がり、その中にはちんぐるまも何本があった。

「ちょっとぐらい、いいじゃないか。こんなにたくさんあるんだし・・・」
勇は、注意されたことに少し腹を立てた。



この人は、自然かいせつ員の松井さんだった。その松井さんが、勇たちを、「立山自然保護センター」というところに案内してくれた。広い部屋には、白いけいじ板が何枚もあり、高山に生えている木の年輪の大きな写真がはってあった。

「さあ、これをのぞいてごらん。」

松井さんはそばの虫めがねを指差した。目を近づけると、固定されている虫めがねのレンズをとおして年輪が見える。勇は虫めがねから目をはなして、横の方からそれをのぞいてみた。そこに、マッチぼうより少し太めの植物のくきが、2センチメートルほどの長さに切られて立っていた。

・・・ちんぐるまに年輪がある。ちんぐるまは木なのだろうか。だって、草と同じようなくきがあるではないか。

「ちんぐるまのくきには、年輪があるのですか。」

勇は、思わず大きな声で聞いた。

「そうです。高山植物には、木の仲間と、多年草の2種類があって、これは木の仲間です。ところで、その年輪を数えてごらん下さい。」

松井さんに言われて、勇は急いで虫めがねに目をおしつけるようにして年輪を数えた。10以上は確かにある。それ以上はぎっしりつまっていて数えられない。

「ああ、たったマッチぼうくらいの太さになるのに10年以上も・・・」

勇は、ちんぐるまに年輪があるとわかったときよりも、もっとおどろいた。そして、こしをおろして折ってしまったちんぐるまを思い出して、むねがきゅっといんだ。

「昔から立山では、『^{いちふみじゅうねん}一ふみ十年』という言葉があるのです。」

松井さんは、静かに勇に語りかけた。

「それは、『高山植物をふみつけてしまうと、もとのようになるには、10年以上もかかるよ。みんなで気をつけよう。』という合い言葉なのです。バスが通っていない昔は、山へ登ることがたいへんつらいことでした。自分の足だけがたよりですからね。それでも山へ登るといのは、山がとても好きだからなのです。山が好きな仲間はこの合い言葉にして、みんなで山の自然を守ってきたのですね。

今は、バスでだれでも来ることができます。そしてたくさんの人に、この大自然を味わってもらいたいと思います。しかし、なかには平気で花を折ったり、ふみつけたりする人もいます。そんな人を見ると哀しくなります。そんな人は、なんのために山へ来たのかと思いますよ。」勇は、その言葉一つ一つに重みを感じていた。



立山の自然

弥陀ヶ原（みだがはら）

